

小規模企業と地域社会との関わりかたの研究 -灘五郷の清酒製造企業を対象として-

建設学専攻
プロジェクトデザイン研究

まつもこうだい
MJ23149 松本昂大
指導教員 岡野道子

序章 はじめに

0-1 研究背景

清酒は日常会話では「日本酒」と呼ばれることが多く、日本人が独特の感性と技術で育んできた酒である。清酒は冠婚葬祭など日本の文化や歴史にも関わっており日本人の生活に溶け込んでいる。また、清酒は地域性をもっているため、清酒製造企業は地域の経済を支える文化的資産としての役割も果たしてきた。

0-2 研究目的

灘五郷が位置する兵庫県西宮市では従業員数 20 名以下の小規模企業と呼ばれる企業が多く存続している。灘五郷には清酒の生産量ランキングに常に上位である白鶴酒造や菊正宗酒造などの大企業、中小企業が立ち並び、日本中に流通している清酒を製造している。その中で小規模企業が多く存続できている西宮郷には小規模企業が存続できる要因があり、地域社会と小規模企業の清酒製造業者との関係や小規模企業同士の共同体が影響しているのではないかと考えた。清酒に限らず小規模企業は代替困難なサービスを行っていることが多く、地域社会のなかで必要な存在である。

このように大企業に対抗し、小規模企業が存続している事例を調査し、減少傾向にある製造業の小規模企業が地域社会で存続する要因の一端を示すことを目的とする。

第1部 灘五郷の小規模企業の実態調査

第1章 灘五郷の概要

1-1 清酒と製造施設

清酒製造企業が発展する過程で在方型と町家型の二種類の発展が見られる。在方型は市街地から離れた場所で発展した酒蔵で、町家型は江戸時代の町家で発展した酒蔵であり、接道にむけて清酒を量り売りで販売する「みせ」が設けられていることが特徴である。江戸時代の灘五郷には千石蔵と呼ばれる形式がみられ、生産量が増えると別の敷地を買い取り新しい千石蔵を建築していた。

1-2 灘五郷の歴史

室町時代には清酒が作られていたが、大きく発展したきっかけが 1754 年の勝手造り令である。米価下落に対処するため、酒造統制を緩和し、厳禁であった農村の酒造も容認したと言われている。そして、樽廻船として江戸に下り酒として流通されたことにより大きく発展した。灘酒は「灘の生一本」とも呼ばれ、江戸入津樽数は 72 万樽と全体の 60%を占め、最盛期を迎えた。

1-3 灘五郷の変遷

宿場町として栄えていた西宮は町家型の酒造業として発展し、江戸への流通を行っていた灘三郷(旧編成)との対立構造であったが、1886 年から西宮郷も含めた新編成の灘五郷となっている。

1-4 灘五郷の発展の要因

灘五郷の発展には大量の樽酒を、江戸を中心に全国へと下らせたという地理的要因のほかに、宮水という酒造りに適した水を 1837 年に現在の兵庫県西宮市で発見したことが大きい。

また、小規模な酒造りから、大きな酒蔵での酒造りへと発展するにつれて、高い技術力を持った丹波杜氏が灘に出稼ぎに来たということも影響の一つである。

第2章 灘五郷の清酒製造企業の概要

現在の灘五郷の企業の従業員数を比較すると、灘五郷には大企業から小規模企業まで様々な規模の企業が存続していることが分かった。特に西宮郷には多くの小規模企業が存続し、創業年や他の地方から移転、独立などバックグラウンドも様々である。

また、灘五郷での清酒製造に欠かせない宮水という資源が、西宮市が定めた条例や宮水保存調査委員会を守られていることが分かった。

表 1 灘五郷の清酒製造企業一覧(筆者作成)

	名前	代表銘柄	創業年	従業員数	企業分類
今	大関株式会社	大関	1711	345	中規模企業
津	今津酒造株式会社	扇正宗	1751	1	小規模企業
西宮	辰馬本家酒造株式会社	白鷹	1662	180	中規模企業
	白鷹株式会社	白鷹	1862	38	中規模企業
	日本盛株式会社	日本盛	1889	169	中規模企業
	木谷酒造株式会社	喜一	1833	4	小規模企業
	國産酒造株式会社	灘自慢	1861	2	小規模企業
	万代大源酒造株式会社	徳若	大源酒造から独立(2005)	2	小規模企業
	北山酒造株式会社	鳥美人	神戸から移転(1962)	1	小規模企業
	大澤本家酒造株式会社	寶線	堺から移転(1954)	3	小規模企業
	松竹酒造株式会社	暹一	宝酒造から独立	3	小規模企業
	本野田酒造株式会社	金鷹	江戸時代末期	1	小規模企業
魚崎	宝酒造株式会社	松竹梅	伏見から移転	1,243	大企業
	櫻正宗株式会社	櫻正宗	1625	120	中規模企業
	株式会社小山本家酒造	空蔵	江戸時代後期	188	中規模企業
	太田酒造株式会社	千代田蔵	1874	20	小規模企業
御影	白鶴酒造株式会社	白鶴	1743	391	大企業
	菊正宗酒造株式会社	菊正宗	1659	298	中規模企業
	株式会社神戸酒心館	福寿	1751	50	中規模企業
	刺菱酒造株式会社	刺菱	伊丹から移転(1929)	55	中規模企業
	株式会社安福又四郎商店	大風正宗	1751	5	小規模企業
西	泉酒造株式会社	仙介・徳泉	1756	5	小規模企業
	沢の鶴株式会社	沢の鶴	1717	180	中規模企業

第3章 清酒製造企業へのヒアリング調査

3-1 ヒアリング調査概要

図 1 のように灘五郷に存続する 2 者、小規模企業である國産酒造と、中規模企業である白鷹酒造に対して、企業同士の関わり、地域との関わり、宮水井戸場概況の 3 項目のヒアリング調査を行った。



図 1 ヒアリング調査対象(筆者作成)

3-2 小規模企業(國産酒造)へのヒアリング結果

小規模企業である國産酒造の創業は1861年で、約140年の歴史をもつ。戦前は現在の所在地を中心に、10蔵で最高約1万石(1800kl)の清酒醸造高を記録していたが、阪神淡路大震災で清酒製造施設の大半が倒壊した。それに伴い杜氏の高齢化や清酒の需要が減少していく現状をみて、清酒の製造を他社(大関酒造)に委託することを決めた。

ヒアリング調査によると、西宮の酒蔵は同じ境遇にある企業も多いとのことで、小規模な企業の多くは似たような境遇であると推測される。

a) 企業同士の関わり

生産提携を行っている大関酒造以外の企業とは意見交換のみを行っている。灘五郷酒造組合や西宮市の清酒製造企業が集まる西宮十日会ではイベントに関する会議などを行っている。

宮水保全委員会という西宮市、灘酒研究会、西宮市の酒蔵の集まりでは宮水に関する調査結果の報告などを定期的に行っている。

b) 地域との関わり

従業員数が少ないため、出店形式のイベントには参加することができないが、製品のみを販売するイベントには参加している。

イベントは主に灘五郷酒造組合から声がかかり、小規模な企業はファンを増やす機会が限られてしまうため、このような機会の影響が大きく、将来的にはイベントを通して銘柄の名が全国に広まることを目標としている。

c) 宮水井戸場概況

西宮市石在町に在る國産酒造の宮水の井戸場は、第二次世界大戦や阪神淡路大震災の被害を受けずに残り、現在も定期的に水質を調査し使える状態ではあるが、使用していない。

3-3 中小企業(白鷹酒造)へのヒアリング結果

1862年に辰馬本家酒造から独立し、清酒製造を行った。第二次世界大戦では鉄筋コンクリートの蔵以外は全部焼けてしまい、辰馬本家酒造から蔵を借りて戦後再始動した。

宮水は第二次世界大戦、阪神淡路大震災ともに被災を免れ、市民の方に飲料水として供給するなど、落ち込んでいた業界を励ました経緯がある。

3-4 酒造組合へのヒアリング結果

灘五郷酒造組合の活動資金は、各企業は固定費に加え、製造、販売の割合に合わせて決められている。この仕組みは大企業が多く、小規模な企業が少なく払うようになっているが、組合からの扱いは大企業と小規模な企業を等しく扱っている。

灘五郷酒造組合は多くのイベントを主催、共催している。地元をターゲットにしたものであり、大企業と小規模企業が横並びで出店できるこのようなイベントは小規模企業のファン獲得や知名度の向上にも繋がる。

3-5 まとめと考察

ヒアリング調査の結果から、存続を支える企業同士の共同体は幾つかあるが、何れも大企業の恩恵を享受して運営しており、小規模な企業の共同体はない。

また、図2のように小規模企業は生産面で大企業に製造、広報面で組合を頼ることで存続している。

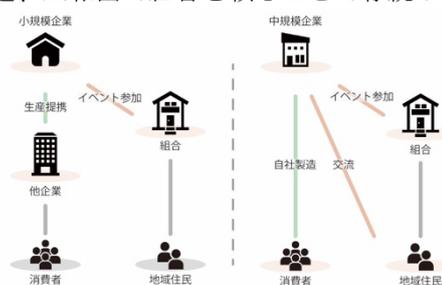


図2 小規模企業、中規模企業の実態(筆者作成)

第2部 灘五郷の小規模企業の復興計画提案

第4章 國産酒造の復興計画提案

小規模企業である國産酒造が阪神淡路大震災以降、製造を休止し、生産面を他企業、広報面を組合に頼っている現状は、小規模企業としての地域に密着した活動体という役割を果たすことができていない。また、現状維持では製造業の廃業に等しく、清酒製造業者の減少を止める計画が必要である。

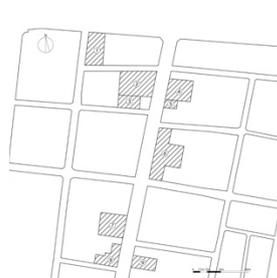


図3 宮水井戸 対象敷地(筆者作成) 図4 宮水井戸(筆者撮影)

そこで、國産酒造の宮水井戸場と周辺の宮水井戸場を対象敷地として、自社製造の再開を行う狭小製造場と各企業が地域との密着した活動を行う空間の計画を行う。各企業の宮水井戸場に遊歩道を設置し、その間に狭小製造場や休憩スペース、ギャラリーなどの施設を設置する。現状、整備されていない宮水井戸場を整備し、地域交流活動の拠点とすることで、西宮の地理的象徴である宮水という資源を強調し、シビックプライドの醸成と、文化的資産を社会全体で支える基盤作りとなる。

終章 結論

本研究では灘五郷に在る小規模企業、中規模企業を調査し、小規模企業は他社や組合を頼り存続していることが明らかになった。この事実は災害で被災した小規模にとっては生存のための選択であるが、清酒製造業全体として製造業者数の減少、働き手不足などの課題を残すとともに、地域としての文化的資産の損失である。

本研究をきっかけに日本の文化、歴史にも深く関わる清酒製造業が伝統的な技術を継承しながら存続し、街のシンボルとして文化的資産を活かした都市整備が行われることを期待する。

参考文献

- 1) 山口昭三:日本の酒蔵,九州大学出版会,2009.3
- 2) 鈴木芳行:日本酒の近現代史,吉川弘文館,2015.5
- 3) 西村隆治:灘の蔵元三百年:国酒・日本酒の謎に迫る,径書房,2014.5